

皇子宮の経営

— 大兄と皇弟 —

はじめに

- 一 皇子宮と大兄
- 二 皇弟皇子
- 三 大皇弟
- 四 主稻と屯田司舎人

論文要旨

皇子宮とは、古代において大王宮以外に営まれた王族の宮のうち皇子が居住主体である宮を示す。本稿では、この皇子宮の経営主にはどのような王族が、どのような条件でなり得たのかを考察の目的とした。

その結果、皇子宮の経営主体は大兄制と密接な関係にあるが、必ずしも大兄に限定されないことが確認できた。皇子宮の経営は、王位継承資格を有する王族内の有力者が担当し、とりわけ同母兄弟中の長子である大兄が経営主体になることが多かったが、それ以外にも、庶弟のなかで人格資質において卓越した人物が特に「皇弟(スメイロド)」と称されて、その経営権が承認されていた。

穴穂部皇子・泊瀬仲王・輕皇子・大海人皇子・弓削皇子などがその実例と考えられる。「皇弟」は天皇の弟を示すという通説的解釈が存在するが、実際の用例を検討するならば、通説のように同母兄が大王位にある場合に用いられる例

五 仲王・同母弟
おわりに

は意外に少なく、穴穂部皇子や弓削皇子など大兄以外の有力な皇子に対する称号として用いられるのが一般的であった。「皇弟(スメイロド)」の用字が天皇号の使用以前に遡れないとするならば、本来的には「大兄」の称号に対応して「大弟(オホイロド)」と称されていたことが推定される。

ただし、大王と同じ世代のイロド皇子がすべて「皇弟」と称されたわけではないことに留意すべきであり、大兄でなくても、人格・資質において卓越した皇子が第二子以下に存在した場合に限り、こうした称号が補完的に用いられたと考えられる。「大兄の原理」のみにより王位継承は決定されるわけではなく、「皇弟の原理」とでも称すべき異母兄弟間の継承や人格・資質をも問題にする副次的・補完的な継承原理は「大兄の時代」とされる継体朝以降も底流として存在したことが推測されるのである。

仁 藤 敦 史

はじめに

皇子宫とは、古代において大王宮以外に営まれた王族の宮のうち皇子が居住主体である宮を示す。⁽¹⁾ 筆者はこれまで、皇子宫のうち厩戸皇子と山背大兄王の親子が経営する斑鳩宮についての分析をおこない、その居住形態・経済基盤・経営形態などについて考察を加えてきた。⁽²⁾ また、草壁皇子らが居住した嶋宮の伝領過程についても論じた。⁽³⁾ しかしながら、そうした考察はあくまでも事例の考察に主眼を置いたため、皇子宫全体について一貫した見通しを提示することは不十分であった。本稿では、皇子宫の経営主にはどのような人物が、どのような条件で就き得たのか、全体的な考察を通じて明らかにしたい。その際、近年議論が活発化している大兄制や長屋王家木簡の問題などにも触れ、私見を提示することにする。

一 皇子宫と大兄

まず、皇子宫の経営主体になりうるのはどのような王族かという立場から大兄制の議論を概観してみたい。『日本書紀』等によれば、六世紀から七世紀にかけて「大兄」の称を持つ皇子が多数確認される。井上光貞氏は、大兄の特徴として、原則として天皇の長子であり、多くが後に天皇または太子となっており、七世紀中葉にはその実例が見えなく

なることを論じ、固有法的な長子相続原理による王位継承上の制度的な呼称とする見解を提示された。⁽⁴⁾ 以後、大兄制をめぐる議論はこの井上説をめぐって活発化する。以後の研究で明らかになった基礎的事実としては、まず直木孝次郎氏により大兄の初見は井上氏が指摘された五世紀前半の「大兄去来穗別尊」(後の履中天皇)ではなく、六世紀前半の「勾大兄皇子」からと修正された。「大兄去来穗別尊」の「大兄」は、『古事記』では「大江之伊耶本和気命」と表記され、淀川河口付近の地名である「大江」とするのが妥当とされた。⁽⁵⁾ さらに、井出久美子・荒木敏夫・田中嗣人氏らにより「大兄」の称は王族以外にも用いられたことが指摘された。⁽⁶⁾ その時期は、王族による使用例がなくなる七世紀後半以後に限定されているという批判もあるが、大平聡氏が指摘された『北史』の例によれば、五く六世紀の新羅にも大兄が存在したことになり、古くは王族のみに用例が限定されるという議論は成立しにくい。⁽⁸⁾

次に、議論の焦点となっているのは大兄が王位継承との関係でどのような存在であったのかという点である。代表的見解としては大兄が皇位継承にかかわる「制度的通称」と考える説⁽⁹⁾および単なる同母兄弟中の長子を示す通称にすぎないとする説に⁽¹⁰⁾大きくは二分される。前者はさらに、同時期に大兄が一人しか存在しなかったか、複数存在したかについて議論が分かれ、⁽¹¹⁾後者についても一般氏族における族長権の継承に係る称号であるかどうかについては議論が分かれている。⁽¹²⁾

こうした大兄制をめぐる議論において皇子宫と大兄との関係をはじめて指摘されたのは荒木敏夫氏である。すなわち、大兄について「母を同

じくする王族内の単位集団の代表」と定義し、王族内の有力な王位継承資格者が使用すると、長子の意味だけにはとどまらない「ヒツギノミコ」（皇太子制成立以前の王位継承にかかわる有力な王族、後の皇太子とは異なり一度に複数が存在し得る）としての内容が付加されるという重要な指摘をされた。すなわち、この単位集団の物質的基礎が皇子宮であり、皇子宮の経営主体として大兄の存在に注目されたのである。

大兄をめぐる議論については、基本的に筆者はこの荒木説に賛同するのであるが、本稿の主題である皇子宮の経営主体という観点から見た場合、宮の経営主体となっているにもかかわらず、大兄ではない王族の例が少なからず存在する。その例外について荒木氏はすべてを「大兄の論理」で割り切ろうとされるが、それだけで説明することには躊躇せざるをえない。すなわち、『日本書記』の描写に従うならば当初から有力な王位継承予定者は限定されており、それはおおむね大兄を称する皇子に相当するのであるが、王族内の単位集団の中で彼が同母兄弟中の長子であるという理由だけですんなり「大兄」の称号を自称できたかどうかは自明ではなく、別に検討されなければならない。すべての同母兄弟中の長子が大兄を称していないことからすれば、限定された者だけに与えられたことは当然であるが、その限定の理由およびプロセスを明らかにすることが要求される。その場合、大兄以外の王族が皇子宮の経営主体になった例を検証することは、裏返せば大兄が自動的に皇子宮の経営主体になり得たかどうかにも関係し、大兄制そのものの議論に大きな影響を与えることになる。最近、篠川賢氏は、大兄を称する王族のみに共通し

て認められる、明確な性格の見出し難いことを大きな論拠として荒木説を批判した。大兄に共通する性格が明確でないことから、消去法的に長子の意味する敬称にすぎないという結論を導かれるのである。⁽¹³⁾ その結論には必ずしも従いにくいのが、荒木説において例外的な事例の処理・説明に必ずしも成功していないことが、こうした批判を招いたのであり、皇子宮と大兄の相関関係について、その継承原理を明確化する必要があるように思われる。

まず、王族内で大兄を称する皇子の実例は、井上光貞氏が指摘された八例から直木孝次郎氏の批判に従って、仁德皇后の長子である大兄去来穗別尊を除いた以下の七例であることに大きな異論はない。⁽¹⁴⁾

〔名前〕	〔系譜関係〕	〔出典〕	〔即位〕
1 勾大兄皇子	継体皇后の長子	記紀	安閑
2 箭田珠勝大兄皇子	欽明皇后の長子	紀	
3 大兄皇子(橘豊日命)	欽明妃の長子	紀	用明
4 押坂彦人大兄皇子	敏達元皇后の長子	紀	
5 山背大兄王	厩戸皇子の一子	紀・帝説	
6 古人大兄皇子	欽明夫人の一子	紀・家伝	
7 中大兄皇子	舒明皇后の長子	紀・家伝	天智

さらに、皇子宮の経営主体であることが伝えられる王族としては、以下のような実例が知られる。

〔宮名〕	〔経営主体〕	〔系譜関係・備考〕
1 菟道宮	太子菟道稚郎子	応神の子

	桐原日桁宮	『山城風土記』逸文	
2	難波(宮)	大鶴鸕尊(仁徳)	応神の難波大隅宮？
3	太子宮	太子去来穂別(履中)	仁徳の難波高津宮？
4	大草香皇子家	大草香皇子	仁徳の子
5	市辺宮	市辺押磐皇子	履中の子
6	柴宮	億計王(仁賢)	市辺押磐皇子の子
		弘計王(顕宗)	同上
7	海部王家	海部王	系譜未詳、詠語田
8	糸井王家	糸井王	系譜未詳、詠語田
9	水派宮	押坂彦人大兄皇子	敏達の子、広瀬郡城戸郷？
10	穴穂部皇子宮	穴穂部皇子	欽明の子
11	上宮	太子厩戸皇子	用明の子
12	斑鳩宮	太子厩戸皇子	用明の子
			法隆寺東院地下遺構
13	泊瀬王宮	山背大兄王	厩戸皇子の子
	(鮑波宮)	泊瀬王	厩戸皇子の子
14	軽皇子宮	軽皇子(孝徳)	成福寺付近
15	私宮	古人大兄皇子	茅渟王の子
16	皇太子宮(宮殿)	中大兄皇子(天智)	舒明の子、大市宮？
17	市経家	有間皇子	舒明の子、嶋宮？
			孝徳の子

18 皇大弟宮

大海人皇子(天武)

舒明の子、「大津京」内

※ 天武の皇子たちについては省略する。

皇子宮の出現は、応神・仁徳朝における伝承的なものを除けば、ほぼ六世紀の後半以後と考えられ、押坂彦人大兄皇子の水派宮や穴穂部皇子宮を確実な実例とすることができ。ちなみに、伝承上においても、系譜未詳の諸王を除けば(これらは宮でなく家と表記される)、ほぼ皇子宮は同一世代にかたまることなく、同母兄弟集団ごとに設定されたことが確認される。

大兄出現との関係からいえば、大兄が継体の子供の世代(勾大兄皇子)から出現するのに対して、皇子宮は継体の孫の世代から出現し、ほぼ時を同じくしていることが指摘できる。さらに、『日本書紀』には明瞭な記載がないが、勾大兄皇子は名を同じくする勾金橋宮で即位して安閑天皇となつていふことからすれば、即位前の段階から皇子宮を同所で経営していた可能性は高いといえる。もしそうであれば、大兄と皇子宮の出現は同時期と考えることができる。大兄と皇子宮の経営がセットで確認されるのは押坂彦人大兄皇子・山背大兄王・古人大兄皇子・中大兄皇子の四人で大兄の実例の後半部をカバーしている。前半の三人については皇子宮を経営したという明瞭な記載を欠いているが、勾大兄皇子(安閑)と同じく大兄皇子(用明)も後に即位しており、皇子宮を基礎として大王宮に格上げされたとするならば問題はなく、箭田珠勝大兄皇子も途中で死没していることからすれば、後半の四人と同様に考えることは可能と思われる。

むしろ問題となるのは、大兄と称されないにもかかわらず皇子宮の経営主体になっている例が少なからず存在することである。すなわち、穴穂部皇子の宮、厩戸皇子の上宮・斑鳩宮、泊瀬王の飽波宮⁽¹⁵⁾、輕皇子の宮、有間皇子の市経家、大海人皇子の皇大弟宮などである。このうち、厩戸皇子の上宮・斑鳩宮、有間皇子の市経家についてはいずれも長子とされるので一応除外しておく。以下では残りの四例、特に次男以下であることが明瞭な穴穂部皇子と大海人皇子について詳しく検討してみたい。

一一 皇弟皇子

まず、穴穂部皇子の系譜関係については、『日本書紀』欽明二年三月条にその記載があり、父は欽明天皇、母は蘇我氏出身の小姉君とする。兄弟関係については以下のような異伝もあり一定していない。⁽¹⁶⁾

〔本文〕		〔一書(A)〕		〔一書(B)〕	
1	茨城皇子	1	茨城皇子	1	茨城皇子
2	葛城皇子	2	泥部穴穂部皇女	2	住迹皇子
3	泥部穴穂部皇女	3	泥部穴穂部皇子	3	泥部穴穂部皇女
4	泥部穴穂部皇子	(住迹皇子)	4	泥部穴穂部皇子	
	(天香子皇子)	4	葛城皇子	(天香子)	
	(住迹皇子)	5	泊瀬部皇子	5	泊瀬部皇子
5	泊瀬部皇子				

穴穂部皇子は、天香子皇子または住迹皇子の異名もあり、一書(B)で

は、二男に住迹皇子の名もみえ混乱している。諸伝承で一致しているのは、長男の茨城皇子、四男の泊瀬部皇子、そして姉が泥部穴穂部皇女とする点である。葛城皇子あるいは住迹皇子との兄弟関係が混乱しているため穴穂部皇子が次男(第三子)あるいは三男(第四子)であったか確定しにくい、少なくとも本来的な大兄的地位にあったのは茨城皇子であり、穴穂部皇子でなかったことは確実である。

にもかかわらず穴穂部皇子は皇子宮を経営していることが確認される。すなわち、『日本書紀』崇峻即位前紀に「穴穂部皇子宮」とみえ、「棲」や「屋」がその宮内に存在したことが知られる。一方、『日本書紀』用明元年五月条の分註には「皇子家門」と表記されている。すでに用明朝初期において、穴穂部皇子を殯宮に入れなかったことを理由に三輪君逆を殺す許可を二人の大臣に承諾させるほどの実力者であったことからすれば、この間に「家」から「宮」への格上げを想定するよりも、用明朝の初期から皇子宮を経営していたと考えるのが妥当と考えられる。「皇子家門」の表記が「門底」という用語の説明として加えられた分註であることからすれば、「皇子家」という表現は用明朝当時のものとするよりも、宮号表記は皇太子に限定されるべきだという『日本書紀』編纂当時(あるいはそれ以後)の意識⁽¹⁷⁾により家と表記された可能性が高いと思われる。

荒木敏夫氏は、穴穂部皇子は当初から大兄の地位にあったのではないとされ、小姉君所生の長子茨木皇子(馬木王)が磐隈皇女を奸したため王位継承の資格者としての地位を失格したことを想定し、大兄の地位が

同母兄弟間でスライドして穴穂部皇子に移譲されたとする。荒木説に従えば大兄の地位の移動に伴い「皇子家」から「皇子宮」への格上げも想定されることになるが、有力な王族としての国政参与が後述するように用明朝の初期から確認され、当時まだ大兄たる地位にいたと思われる茨木皇子（馬木王）との質的な区別は想定しにくい。

さらに、荒木氏が指摘された小姉君所生の長子茨木皇子（馬木王）が磐隈皇女を奸したため王位継承の資格者としての地位を失格したとの想定にも疑問がある。確かに『日本書紀』欽明二年三月条には、

其二曰「磐隈皇女」。更名夢皇女。初侍祀於伊勢大神。後坐奸皇子茨城解。

とあるが、そのことにより大兄の地位を失ったことは明らかではない。臣下の湯人が斎宮たる皇女を奸した場合や木工が采女を奸した場合にその行為が死に相当する大罪であることは雄略朝における伝承などから知られるが、⁽¹⁸⁾異母兄弟の王族については必ずしも明らかではない。それどころか、『日本書紀』敏達七年三月壬申条には、

以菟道皇女、侍伊勢祠。即奸池辺皇子。事顯而解。

と見え、斎宮である菟道皇女が池辺皇子に奸されたことが知られる。池辺皇子が具体的に誰を示すか、『日本書紀』には明示がないが、『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』には、用明天皇（大兄皇子・橘豊日命）を池辺皇子とする用例が見られる。⁽¹⁹⁾池辺双槻宮の宮号にちなむとすれば、敏達朝において池辺皇子は用明以外には想定しにくいと思われる。もしそうならば、大兄であった用明は斎宮を奸したことが明らかであるにもかか

わらず、即位したことになり、そうした事実は大兄の地位にとって何の妨げにもならなかったことが確認される。従って、荒木氏が主張されるような、小姉君所生の長子茨木皇子が斎宮たる磐隈皇女を奸したことにより王位継承資格者としての地位を失格したとの想定は成立しにくいことになる。しかも、長子茨木皇子が王位継承の資格を失格したとしても「大兄の原理」によれば順当には第三子たる葛城皇子が継承することになったはずである。

それでは、第四子とされる穴穂部皇子が皇子宮の経営主体になり得たのはどのような理由が考えられるであろうか。ここでは、『古事記』欽明段に三枝部穴太部王すなわち、穴穂部皇子の別名として天皇の弟を示す須売伊呂杼（皇弟）の名が用いられたことを重視したい。『日本書紀』用明二年四月丙午条にも「皇弟皇子」という表記があり、

皇弟皇子者、穴穂部皇子、即天皇庶弟。

という注記がある。この条は、用明天皇が病を得て、三宝に帰依しようとして、群臣に議論をさせている最中に、穴穂部皇子が豊国法師を率いて堂々と「内裏」に入ったことを記したもので、皇子が国政に参与する有力な皇子であることを示している。こうした条にわざわざ「皇弟皇子（スメイロドノミコ）」という別称を用いたことの意味は重要と思われる。すでに、『日本書紀』敏達十四年八月己亥条に、

三輪君逆、使隼人相距於殯庭。穴穂部皇子、欲取天下。発憤称曰、何故事死王之庭、弗事生王之所一也、

とあり、敏達の殯に諸臣が侍している際、皇子は天下を取る意志を公表

し、「なぜ死王（敏達）の庭に仕え、生王（穴穗部皇子）のところに諸臣が仕えないのか」と憤激したと伝える。用明朝に穴穗部皇子を殯宮に入れなかったことを理由として三輪君逆を殺す許可を二人の大臣に簡単に承諾させたことは先述した。おそらく敏達の妃であった炊屋姫を殯宮にまで乱入して犯そうとしたのは、婚姻関係を持つことで異母兄弟間で王位継承上、優位に立つことが計算されたからであろう。⁽²⁰⁾ 用明の死後には、

物部大連軍衆、三度驚駭。大連元欲去余皇子等、而立穴穗部皇子⁽²¹⁾。
子^ヲ為^ス天皇^ト。

とあるように、物部守屋は他の皇子をすて穴穗部皇子を擁立しようとしている。このように、穴穗部皇子は欽明の子の世代では有力な王位継承資格者であることは、群臣も認める存在であった。こうした地位に対して「皇弟皇子（スメイロドノミコ）」という称号が付されていたことは偶然ではないと考えられる。「皇弟」という名称は本来、天皇（大王）の同母弟に対してのみ用いられる用語であるが、穴穗部皇子の兄に大王であった者はおらず、『日本書紀』が注記するように用明天皇の庶弟であることにちなんだ名称と考えざるをえない。しかも『古事記』ではわざわざ須売伊呂杵という穴穗部と同じような固有名詞的な用い方をしており、用明が単に大兄皇子と称されていたことと対をなした用法といえる。用明には多くの同母弟がいたにもかかわらず異母弟にすぎない穴穗部皇子がことさら固有名詞的に「皇弟皇子（スメイロドノミコ）」と称されたことの意味は重要であろう。大兄の称を王族内の有力な王位継承資格者が

使用すると、長子の意味だけにはとどまらない「ヒツギノミコ」としての意味を有することは荒木氏が指摘する通りだが、この場合の「皇弟」の称号もそれに準じて考えるべきではなからうか。

皇子宮の経営主体という本稿の視角からすれば、その経営は必ずしも大兄に限定されないことになり、「大兄の原理」ではなく、現大王の異母弟という資格によっても、その経営が承認されていたことが想定される。ただし、現大王と同じ世代の皇子のうち、すべての庶弟（イロド）が「皇弟」と称されたわけではないことに注目すべきであり、大兄でなくとも、人格・資質において卓越した皇子が第二子以下に存在した場合に限って、こうした称号が補完的に用いられたと考えられる。「大兄の原理」のみにより王位継承は決定されるわけではなく、「皇弟の原理」とでも称すべき異母兄弟間の継承や人格・資質をも問題にする副次的・補完的な継承原理は「大兄の時代」とされる継体朝以降も底流として存在したことが推測されるのである。

三 大 皇 弟

同様な例は大海人皇子の皇弟宮の場合にも検証することが可能である。この場合の特色は、穴穗部皇子の場合とは異なり、同母兄弟間で複数の皇子宮の経営が確認されることである。後に天武天皇となる大海人皇子は『日本書紀』舒明二年正月戊寅条によれば、

立^ス宝皇女^ヲ為^ス皇后。々生^ス二男一女。一曰^ス葛城皇子。近江大津宮御宇

天皇。二曰「間人皇女」。三曰「大海皇子」。淨御原宮御宇天皇。

とあるように、宝皇女の第三子であり大兄Ⅱ長子とはされていない。⁽²³⁾にもかかわらず、『日本書紀』天武元年五月是月条には、

亦命菟道守橋者、遮皇大弟宮舍人連私糧事^上。

とあり、宇治の橋守が「皇大弟宮舍人」の私糧運搬を禁じているので、大津宮周辺に大海人皇子の宮が経営されていたことが明らかとなる。⁽²⁴⁾

一方、長子である葛城皇子（中大兄皇子）の宮殿経営については、『日本書紀』皇極四年六月己酉条に、

於是、或人説第一謡歌曰、……此即宮殿接起於嶋大臣家、而中大兄、与中臣鎌子連、密圖大義、謀戮入鹿之兆也。

とあり、また『日本書紀』大化三年十二月晦是日条には、

災皇太子宮。時人、大驚怪。

と見え、皇子宮の経営主体であったことは確実である。特に前者の嶋大臣家に接して建てられた「宮殿」とは嶋宮を示すらしい。⁽²⁵⁾

以上によれば、大海人皇子の宮は同母兄弟間において大兄以外にも皇子宮を経営した実例として位置づけることができる。ちなみに、荒木敏夫氏は他の皇子宮との整合性から中大兄皇子と大海人皇子の皇子宮の併存を認めない立場をとり、中大兄皇子の即位後に大海人皇子の皇子宮造立が認められたと解釈される。⁽²⁶⁾しかしながら、同時併存を否定する積極的な根拠を提示されているわけではないので、作業仮説としての域に留まるとしなければならない。同時併存の有無については、そのこと自体が検証されるべき事柄であり、他からの類推で判断するのは危険と思われる。

る。

まず、皇大弟宮は大津宮周辺に存在し、史料上、斉明朝以降に中大兄皇子の宮が見えなくなることは確実である。しかし、近江遷都以前に大海人皇子が皇子宮を経営していた可能性も一方では指摘できる。すなわち、大海人皇子は壬申の乱の前後において倭京に宿泊しているが、その時必ず嶋宮を利用していることが指摘できる。

『日本書紀』天武即位前紀天智十年十月壬午条

入吉野宮。時左大臣蘇賀赤兄臣・右大臣中臣金連、及大納言蘇賀果安臣等送之。自菟道返焉。或曰、虎着翼放之。是夕、御嶋宮。

『日本書紀』天武元年九月庚子・癸卯条

詣于倭京、而御嶋宮。

自嶋宮移岡本宮。

これは近江遷都以前から大海人皇子と嶋宮は密接な関係にあり、皇子宮として利用されていたことにちなむと考えるのが自然である。その居住の時期は、嶋宮の居住者の一人と推定される嶋皇祖母命（糠手姫皇女、大海人皇子の祖母）が没した天智三年六月が一つの目安となる。⁽²⁷⁾祖母との同居を考慮すれば、それより以前の嶋宮への居住を妨げるものではないが、最終的に宮の主人となるのはこれ以後と考えられる。中大兄も皇極朝に嶋宮に居住していたことが知られるが、弟あるいは祖母への伝領を考慮すれば、孝徳朝に火災にあった「皇太子宮」は嶋宮以外の可能性が高いと思われる。「皇太子宮」を嶋宮に比定し、祖母や弟との同居を想定することも可能だが、宮の固有名称でなく、潤色はあるもののわざ

わざ「皇太子宮」という表記をしていることは、少なくとも『日本書紀』編者が律令制下の東宮を意識した上で、中大兄皇子を主人とする排他的な空間を表現したとするのが自然であり、嶋皇祖母命が存命中は嶋宮に対してこうした表記はしにくいであろう。二人にとつての祖母を媒介として、同母兄弟間で嶋宮の伝領が早期におこなわれたことが推測されるのである。

以上によれば、中大兄皇子が即位する以前に、大海人皇子が嶋宮に居住した可能性が指摘でき、大兄Ⅱ長子以外でも皇子宮の経営主体になり得たと思われる。しかも、同母兄弟間での皇子宮の同時併存（中大兄皇子の「皇太子宮」、大海人皇子の嶋宮）が想定できる。

大兄ではない大海人皇子の皇子宮経営が想定されるとすれば、彼が「何時から」、「如何なる資格」を持った上で、有力な王族として国政上に登場するのであろうか。まずは、大海人に付せられたその称号の変化を追ってみたい。

称号	(天智) 訓	巻	記事
皇弟	太子	孝徳紀	白雉四年是歳条
皇弟	皇太子	孝徳紀	白雉五年十月朔条
大皇弟	天皇	天智紀	天智三年二月丁亥条
太皇弟	天皇	家伝	摂政七年正月条
一作皇太弟			
大皇弟	天皇	天智紀	天智七年五月五日条
大皇弟	天皇	天智紀	天智八年五月壬午条

東宮大皇弟	天皇	ヒツギノミコ	天智紀	天智八年十月庚申条
東宮太皇弟	帝		家伝	即位二年十月条
東宮太皇弟		ヒツギノミコ	天智紀	天智十年正月庚申条
皇太子	天皇	ヒツギノミコ	天智紀	天智十年五月辛丑条
東宮	天皇	マウケノキミ	天智紀	天智十年十月庚辰条
東宮	天皇	マウケノキミ	天武紀	天武即位前紀
皇大弟		マウケノキミ	天武紀	天武元年五月是月条
東宮		マウケノキミ	天武紀	天武元年六月甲申条
大皇弟		マウケノキミ	天武紀	天武元年六月丙戌条
大皇弟		マウケノキミ	天武紀	天武元年六月丙戌条

従来の通説では、「大皇弟」にヒツギノミコやマウケノキミの訓が付されているため、皇太子的な意味を持つ「皇太弟」と天皇の弟を原義とする「大皇弟」とを混同して論じる点が問題となる。大海人皇子に対する名称は、古訓では皇太子や東宮を示すヒツギノミコやマウケノキミの称が一般的に用いられるが、本来は皇弟（スメイロド）であり、それに美称の大を付した大皇弟（オホスメイロド）が用いられ、皇太弟という皇太子的な用字はほとんどされていないことが注意される。⁽²⁸⁾大海人皇子に対する称号は、兄である中大兄皇子の地位に連動しており、太子・皇太子に対する皇弟、天皇に対する大皇弟・東宮という用字が対応すると考えられる。大皇弟の大は称制時の潤色を含めて中大兄皇子の天皇即位と対応させて考えるのが妥当である。⁽²⁹⁾

大海人皇子が国政に参与したことが明らかになる最初の記事は、天智

三年以後で、

『日本書紀』天智三年二月丁亥条

天皇命_ニ大皇弟_一、宣_下増_ニ換冠位階名_一、及氏神・民部・家部等事_上。

『日本書紀』天智八年十月庚申条

天皇遣_ニ東宮大皇弟_一於藤原内大臣家_一、授_ニ大織冠_一与_ニ大臣位_一。仍賜_レ姓、為_ニ藤原氏_一。

『日本書紀』天智十年正月庚申条

東宮太皇弟奏宣、或本云、大友皇子宣命。施_ニ行冠位法度之事_一。大_ニ赦天下_一。

『日本書紀』天智十年十月庚辰条

天皇疾病弥留。勅喚_ニ東宮_一、引_ニ入臥内_一、詔曰、朕疾甚。以_ニ後事_一属_レ汝、云々。

などの記事が指摘できる。立太子については「天命開別天皇元年、立為_ニ東宮_一」⁽³⁰⁾とあるように、中大兄皇子が即位した天智七年正月とされるが、それより以前の天智三年から「大皇弟」として国政に参与しているのは明らかであり、立太子記事の前後で政治上の地位に大きな変化があったわけではない。しかも、天智紀において皇太子的な表記や訓がされているにもかかわらず、大海人皇子の立太子記事については、天武即位前紀にしか見えず、天智紀には見えないことから、伴信友以来、立太子の事実を疑う見解が存在する⁽³¹⁾。したがって、天智朝における大海人皇子の政治上の地位は皇太子的な立場ではなく、一貫して兄の地位に付随した皇弟（スメイロド）としての地位によって保証されていたと考えられ

る。先述したように大海人皇子が嶋宮の正式な主人となったのは大海人皇子の祖母である嶋皇祖母命が没した天智三年六月以後と推定したが、「大皇弟」として政治上の活動が確認されるのも、同じ年の二月からで、ほぼ一致する。

以上の考察によれば、大兄でない大海人皇子が皇子宮の経営主体となり得た第一の条件とは、中大兄皇子の弟という皇弟（スメイロド）の地位にあったことで、中大兄皇子の即位および大海人皇子の立太子とは直接の関係がないといえる。従って、中大兄皇子の立太子後における大海人皇子の皇子宮造立を想定し、皇子宮の同時併存を認めない荒木説は成立しにくいと考える⁽³²⁾。

四 主稻と屯田司舍人

次は、大海人皇子の皇子宮の機構を復元することにより、彼の皇子宮経営が天智七年以前からの可能性が高いことを別の角度から論じてみたい。

大海人皇子の勢力基盤を論じる場合に必ず議論されるのは、湯沐令と屯田司舍人の性格である。

『日本書紀』天武元年六月壬午条

詔_ニ村国連男依・和珥部臣君手・身毛君広_一曰、今聞、近江朝廷之臣等、為_レ朕謀_レ害。是以、汝等三人、急往_ニ美濃国_一、告_ニ安八磨郡湯沐令多臣品治_一、宣_ニ示機要_一、而先発_ニ当郡兵_一。仍経_ニ国司等_一、差_ニ発諸

郡、急塞不破道。朕今発路。

『日本書紀』天武元年六月甲申条

即日、到菟田吾城。大伴連馬來田・黃書造大伴、從吉野宮追至。於此時、屯田司舍人土師連馬手、供從駕者食。過甘羅村、夕獵者廿余人。大伴朴本連大國、為獵者之首。則悉喚令從駕。亦徵美濃王。乃參赴而從矣。運湯沐之米。伊勢國駄五十匹、遇於菟田郡家頭。仍皆棄米、而令乘步者。到大野以日落也。

『日本書紀』同日条

越大山、至伊勢鈴鹿。愛國司守三宅連石床・介三輪君子首、及湯沐令田中臣足麻呂・高田首新家等、参遇于鈴鹿郡。

壬申紀の記述に見える湯沐令および屯田司舍人の性格についてはすでに横田健一氏による研究があり通説化している。⁽³³⁾ それによれば、大海人皇子が東宮皇太弟であることを前提にして、律令制下の封戸と比較して、大海人皇子の美濃国安八磨郡にある湯沐邑に対する私的支配権が強いこと、安八磨郡における湯沐邑の面積が広大で、湯沐令の権限が郡司より重いことを指摘する。そして、湯沐令である多品治や田中足麻呂はいずれも国家の封戸をあずかる官僚であるが、その私的性格が否定できないのは、その源流が大化前代の壬生部ないし名代・子代の制に求められるからで、皇子とくに皇太子となるべき人の私経済を賄うべき土地として与えられたことによるとされた。ただし、湯沐令である多品治や田中足麻呂が国家の封戸をあずかる官僚であるとされた点については、直木孝次郎氏により、彼らは官僚ではあっても国家の封戸を預かる官吏ではな

く、皇太弟大海人の直轄地を管理する春宮の職員であるとされた。⁽³⁴⁾

これらの議論は、大海人皇子が東宮皇太弟であることを大前提に議論がなされているが、天智朝段階では皇弟（オホイロド）という称号を有する有力な王族にすぎないことは先に検討したとおりである。皇子宮を経営する皇弟という前提に立つならば、湯沐令についても異なった解釈が可能となる。すなわち、荒木敏夫氏の説に従って天智朝段階には皇太子の制度や東宮機構が整備されていなかったとするならば、⁽³⁵⁾ 皇太子その人を経済的に支えたとされる東宮湯沐の制度自体も疑う必要がある。

まず、東宮湯沐の明確な初見は、『延喜式』春宮坊に「凡東宮湯沐二千戸」、同民部省上に「凡食封者、東宮二千戸」とあるもので、養老令には「中宮湯沐二千戸」「東宮一年雜用料」とあるだけで、⁽³⁶⁾ 東宮の湯沐は令文に記載がないことが指摘できる。また、『新抄格勅符抄』には、

一 諸王諸臣封戸 私注付 禄令所注

太政大臣三千戸 太上天皇同之

左右大臣各二千戸 大納言八百戸

中宮湯沐邑二千戸 東宮二千戸後封

中納言四百戸後封 参議八十戸後封

後封民部式所注

と見え、養老令と『延喜式』の間に東宮湯沐の制度が定められたことについては「後封」の記載から明らかとなる。さらに、宝龜四年二月二十四日の太政官符案によれば、皇太子に対して封一千戸を賜うという記載があることからすれば、⁽³⁷⁾ 東宮湯沐が二千戸に定まったのは早くてもこれ

以後と考えられる。『新抄格勅符抄』にある「民部式」が何時のものか不明だが、天武紀の記載からはかなり時代が隔たり、制度史的には連続しないことが明らかである。⁽³⁸⁾ それでは、孤立した壬申紀における湯沐令の記載はどのように解釈すればよいであろうか。

前川明久氏によれば、「壬申紀」と『漢書』高帝紀の類似を指摘した上で、大海人皇子が壬申の乱において自らを漢の高祖に擬したため、美濃安八磨郡の湯沐邑をあえて反乱の拠点に選んだと推測される。⁽³⁹⁾ 大海人皇子がそこまで用意周到であったとするよりは、むしろ『日本書紀』編者の潤色とするのが自然である。⁽⁴⁰⁾ そのように考えるならば、湯沐令という名称および制度が実在する必然性は必ずしもないことになる。大海人皇子の経済的・軍事的基盤が美濃国安八磨郡付近に存在したことは確かであっても、それが東宮湯沐と呼ばれ、湯沐令という長官により管理されていたことは自明ではないと考えられる。事実、直木孝次郎氏によれば、壬申紀に見える湯沐令高田首新家は『続日本紀』天平宝字七年十月丁酉条に、

前監物主典從七位上高田毗登足人之祖父嘗任美濃国主稻。属壬申兵乱。以私馬奉皇駕。申美濃尾張国。天武天皇嘉之。賜封戸。伝子于子。至是坐殺高田寺僧。下獄奪封。

とある美濃国主稻高田毗登（欠名）と同一人物とされ、湯沐令は主稻とも呼ばれていたことが確認される。そして、奈良時代において主稻には中宮職の舎人が任命され、促稲使とも呼ばれていたとの指摘もある。⁽⁴²⁾

『続日本紀』が『日本書紀』とは異なる名称を採用していることから、

壬申の乱当時、湯沐令が主稻と呼ばれていたことは確実と思われる、湯沐令の名称は大海人皇子を漢の高祖に擬する『日本書紀』編者の潤色と考えておきたい。ただし、湯沐令が壬申紀では三名みえること、湯沐之米を運んでいたのが伊勢国駄五十匹とあり、単に国司とある三輪君子首が伊勢国の介であったと推定されることなどから、美濃国安八磨郡だけでなく伊勢国にも湯沐邑が存在したとする説もある。⁽⁴⁴⁾ 湯沐邑が美濃国および伊勢国に複数存在したかどうかは明らかではないが、その可能性は少ないと考えられる。

「湯沐令」が壬申紀では三名みえることについては、官司と官職の未分化および一官司二長官制の実例、皇子宮の私的な家政機関であること、などを考慮すれば、それほど不自然ではないと思われる。すなわち、壬申紀に限っても、官職名の記載がなく単に「倭京留守司」とあり、職階の区別なく「高坂王」と「坂上直熊毛」の二名が見えるなど、⁽⁴⁵⁾ 大宝令以前では明確な官司と官職の区分、さらには長官・次官・判官という職階区分も曖昧であったことが指摘できる。また、律令制下でも内膳司・造大弊司・造宮省・催造司などの官司には同時に二人の長官が任命される慣行があり、古くからの伝統が存在したと考えられること。⁽⁴⁶⁾ さらに、湯沐令（主稻）の職が皇太子・東宮などの明確な制度的基盤を背景に有するものではなく、本来は明確な官僚制秩序を持たない大海人皇子の家産を運営する家政機関の職名であることを考慮しなければならない。壬申紀が「湯沐令」として三人の名を記すこと、その内部において不分明ながら多臣品治・田中臣足麻呂・高田首新家の順で階層的な秩序が存在

した⁽⁴⁷⁾こと、とは矛盾しないと考えられる。従って、主稱を湯沐令の下級職員に限定する必要は何もないと思われる。

以上によれば、大海人皇子は皇子宮（嶋宮・皇弟宮）を維持するため美濃国安八磨郡に私領を経営し、主稱と呼ばれる自己の家政機関に属する役人を少なくとも三名以上派遣していたことになる。斑鳩宮の家政機関の分析から明らかになった階層構成を適用するならば、三人のうち多臣品治や田中臣足麻呂は家臣的豪族であり、高田首新家は舍人階層に位置づけることができる⁽⁴⁸⁾。

次は屯田司舍人土師連馬手の性格について考察する。横田健一氏は屯田司舍人について、令制下では屯田が宮内省に属し、天皇の供御料田とされたのに対して、舍人は中務省あるいは東宮坊に属することの矛盾をまず指摘する。その上で、東宮が屯田司を管理する権限を有していたことの証明として、『日本書紀』の仁徳即位前紀に見える説話を利用する。すなわち、額田大中彦皇子が、「倭屯田」は弟の大山守が管理しているので、これからは自分が支配すると宣言した時、「屯田司」である出雲臣の祖先淤宇宿祢はその由緒を知らず、倭直吾子籠だけが「倭屯田」の由緒を説明できた。その時の証言に、

伝聞之、於纏向玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彦尊、定倭屯田也。是時、勅旨、凡倭屯田者、每御宇帝皇之屯田也。其雖帝皇之子、非御宇者、不得掌矣。是謂山守地、非之也。

とあることから、「倭屯田は天皇の屯田であるから天皇の予定者である太子のみにその管理が許されていた」と解釈し、「東宮が屯田を管理す

る」という思想および事実性が存在したことを論じられた⁽⁴⁹⁾。以後も、横田氏の解釈を継承して、太子が屯田を管理したことを承認する説は多い⁽⁵⁰⁾。けれども、仁徳即位前紀を根拠に、土師連馬手を東宮舍人と解し、大海人皇子が東宮の資格で天皇に直属する屯田の管理を任されていたとする横田説に問題がないわけではない。

まず、仁徳即位前紀の説話の成立年代については、すでに指摘されているように『古事記』に同様の説話がなく、「旧辞」には存在しなかったらしいこと、屯田司という進んだ管理形態は仁徳朝にふさわしくないこと、「御宇」という表記は「治天下」よりも新しいこと、などから仁徳朝の史実としては認定できないとされている⁽⁵¹⁾。もしそうとすれば、「東宮が屯田を管理する」という思想や事実、後世に確認されなければならぬが、先述したように東宮制度が成立するのは持統朝以後であり、令制では中宮湯沐と比較するならば東宮に十分な経済的基盤を与えられた痕跡はなく、むしろ屯田（官田）は天皇の供御料田的性格を強めていくのである⁽⁵²⁾。従って、「東宮が屯田を管理する」という太子に大きな権限を与えるような思想は、天皇中心主義を強調する『日本書紀』編者および律令制の理念とは異なるとしなければならぬ。ならば、官司制的秩序が整えられてくる推古朝以後において、同母兄弟中の年長者である太子（大兄）が屯田を管理するという思想が存在したのかということになるが、そうすると「太子」とはされていないが最長子である額田大中彦の屯田管理を否定する根拠としては薄弱なものとなる。いずれにしてもこの説話から「東宮が屯田を管理する」という思想および事実を

確認することはできないといえる。⁽⁵³⁾

やはり、「凡倭屯田者、毎御宇帝皇之屯田也。其雖_レ帝皇之子、非_レ御宇者、不得_レ掌矣」の部分は、「倭の屯田はつねに天下を統治する天皇に属するもので、たとえ皇子でも即位しなければ掌ることができない⁽⁵⁴⁾」と通説に従って解釈するのがよいと思われる。ただし、留意すべきは屯田一般について天皇のみが管理すると主張しているわけではなく、「凡倭屯田者」とあるように、この屯田の特殊性を強調したにすぎない点である。その他の屯田については、天皇が独占していたわけではないと考えられ、孝徳朝に「宜_レ罷_二官司_一処々屯田、及吉備嶋皇祖母処々貸_二稲_一⁽⁵⁵⁾」とあるように、多様な管理形態があったらしい。

この説話から抽出すべき事項は、「太子」でも長子でもない次男の大山守命が一時的にせよ「山川林野」を管掌でき、長子である額田大中彦が「屯田」を管理することについて、屯田司や「太子」でさえ、明確に否定できなかったことであり、一般的には有力な皇子であれば「山川林野」や「屯田」を管掌することができたことを「裏返し」に語っている点が重要と思われる。

さらに、当初は在地豪族である倭直を通じて大王が直接に管理していた倭の屯田も、やがて在地とは直接関係ない中間管理者たる水田司の役人により官司制的に管理されるようになったこと（等質化した管理形態をとるため、各屯田の由緒は重要でなくなり、忘却されていく⁽⁵⁶⁾）が指摘でき、屯田の量的拡大に伴う王権側の対応策として位置づけられる。以上によれば、当初は在地首長と大王との人格的隷属関係による直接的な

支配であった屯田（それゆえに在地首長と大王との関係を語る伝承が重視される）も、やがて、その量的拡大に伴い、必然的に有力な王族や豪族が間接・直接に屯田の管理に介入することができたと思われる。こうした屯田の分有状態が進行した段階において、天皇による屯田の支配権を確認することが必要となり、有力な皇子たちに対して「凡倭屯田者、毎御宇帝皇之屯田也。其雖_レ帝皇之子、非_レ御宇者、不得_レ掌矣」という主張がなされたと推測される。

仁徳即位前紀の説話から有力な王族や豪族による屯田の分有管理が推定されるとするならば、壬申紀に見える屯田司舎人も皇弟である大海人皇子の家政機関の構成員として位置づけることができる。これまで屯田に関する史料は少なく、令制下の官田における供御料田としての性格や「屯田者、毎御宇帝皇之屯田也」という語句からの類推により、天皇に関係した水田という一面的な理解が一般であった。しかし、近年大量に出土したいわゆる「長屋王家木簡」を利用すれば、奈良時代における有力な王族の家政機関の実体を考察することが可能となる。そのうちの一点に、

・耳梨御田司進上 芹二束 智佐二把 右四種進上婢
古自二把 河夫毘一把

・間佐女 今月五日天津嶋

と墨書したものである⁽⁵⁷⁾。これは耳成山周辺に所在した農園から野菜四種を婢の間佐女に持参させたことを示している。また、木上に所在した農園への召使いたちの出勤簿として、

・木上司等十一月日数進 新田部形見 日廿七夕廿一 秦広嶋 日卅夕廿七
忍海安万呂 日卅夕廿六

・十一月卅日

と墨書したものである。⁽⁵⁸⁾ こうした木簡によれば、長屋王のような有力な

王族の家政機関では、各地に所在する農園の現地管理事務所を「山背園司」とか「耳梨御田司」のように呼んでおり、現地の農園管理には使用人が派遣されていたことが知られる。

さらに、『日本霊異記』上巻第五話によれば、厩戸皇子の「肺脯侍者」で、紀伊国名草郡を本貫とする大部屋栖野古連公は、推古十七年に播磨国揖保郡内の土地二百七十三町を管理する「水田之司」に任じられたとある。⁽⁵⁹⁾

長屋王家の「耳梨御田司」および厩戸皇子の「水田之司」はいずれも自己が経営する所領の現地管理事務所として設置されたもので、現地勤務の役人が存在した。「肺脯侍者」とは舎人と同様な存在であり、新田部形見・秦広嶋・忍海安麻呂らも長屋王家に仕える帳内・資人クラスの身分と考えられる。おそらく壬申紀に見える屯田司舎人土師連馬手も同様な存在として位置づけることが可能であろう。すなわち、馬手は大海人皇子に仕える舎人であり、皇子宫を維持するため宇陀付近に設定された私領である屯田の管理に派遣されていた役人と推定される。

これまで「屯田司舎人」の表記が、律令官制の原則では理解しにくい矛盾をはらむ存在であることから、その説明に苦慮し、横田健一氏は太子が屯田の管理を担当することが可能であるとして、馬手は基本的に東宮舎人で、屯田に派遣されていたとした。一方、直木孝次郎氏は東宮舎人が、そのまま屯田司の役人になることは無理があるとして、単純に屯

田司の役人と解された。⁽⁶⁰⁾ いずれの説も律令官制および天皇の屯田という觀念に拘泥しすぎた解釈であり、長屋王家木簡などからの類推により、有力な王族の家政機関の役職名とすれば大きな矛盾はないだろう。

以上によれば、皇弟である大海人皇子は所領経営のために官司制的な機構を保持していたと考えられ、中大兄皇子即位後のわずか数年でこうした機構を整備できたとは思われず、まして、こうした機構が壬申の乱において大海人皇子の反乱部隊の中核になったことからすれば、中大兄皇子が維持した機構を単純に継承したとも考えられない。大海人皇子は中大兄皇子の即位以前から皇子宫を経営し、中大兄皇子の皇子宫とは別組織の機構を維持していたと思われる。

五 仲王・同母弟

長子以外で、皇子宫を経営していたことが確認されるのは、これまで見てきた穴穂部皇子・大海人皇子以外には、軽皇子と泊瀬仲王がいる。

このうち、泊瀬仲王の飽波宮については別稿で論じたことがあるので繰り返さないが、⁽⁶¹⁾そこで得られた結論を敷衍して述べるならば、飽波宮は本来的には厩戸皇子の妃である膳菩岐々美郎女の宮で、泊瀬仲王は母からその宮を伝領したと考えられる。泊瀬仲王には、姉として春米女王がおり、彼女と山背大兄王の婚姻により泊瀬仲王の地位は大きく規定されていた。つまり、彼の王名に使われた「仲」の用字は上宮王家内における彼の序列を示すもので、姉春米女王の別称である「上宮大娘姫王」

の「大娘」および山背大兄王の「大兄」に対して、二番目を意味したと推定される。彼が有した宮の経営権はこうした「仲王」という地位に対応したと考えられ、それは大兄の地位に準じていたことが想定される。ただし、上宮王家を代表するのは山背大兄王であり、対外的に王位継承権を主張できたのは大兄たる山背王に限定されていた点で、「仲王」の地位は、「大兄」と同等とはなっていない。⁽⁶²⁾ 同じく皇子宮の経営主体ではあるが、王位継承上は大兄の存在に規制される「皇弟」と同様な位置づけが「仲王」の名称に対しても可能と思われる。

一方、後に孝徳天皇となる軽皇子についても、『日本書紀』孝徳即位前紀に、

天万豊日天皇、天豊財重日足姫天皇同母弟也。

と見えるが、皇極三年正月乙亥朔条には、

于時、軽皇子、患脚不_レ朝。中臣鎌子連、曾善_ニ於軽皇子_一。故詣_ニ彼宮_一、而将_ニ侍宿_一。

とあり、皇子宮を経営していたことが確認される。この場合は「皇弟」とはでないが、姉である皇極が先に即位していることからすれば、天皇の弟を示す「皇弟」と同じ意味で「同母弟」の用字がなされたことは明らかである。

ちなみに、天武の諸皇子も多くの宮を経営していたことが想定されているが、いずれも同母兄弟中の唯一子か第一子などに限定されている。⁽⁶³⁾

ただ、弓削皇子のみは、長皇子の弟であり長子ではないにもかかわらず、細川山周辺に皇子宮の経営が想定され、位階でも兄の長皇子と同等の扱

いながされている。

『万葉集』巻九—一七〇九番歌

献_ニ弓削皇子_一歌一首

御食向ふ 南淵山の 巖には 落りしは誰か 消え残りたる

『日本書紀』持統七年正月壬辰条

以_ニ淨広宅_一授_ニ皇子高市_一。淨広式授_ニ皇子長与_ニ皇子弓削_一。

これまで論じてきた「皇弟」の一人に含めることが可能のように思えるが、実際にも『万葉集』巻二の二三〇番歌の題詞には、

長皇子、与_ニ皇弟_一御歌一首、

とあり、長皇子の弟である弓削皇子に対して「皇弟」の称がなされていることが確認される。

おわりに

これまでの考察により、皇子宮の経営主体は大兄制と密接な関係にあるが、必ずしも大兄に限定されることが確認できたと思われる。皇子宮の経営は王族内の有力者がおこない、同母兄弟中の長子である大兄が経営主体になることが多かったが、それ以外にも、庶弟のなかで人格資質において卓越した人物が特に「皇弟」と称されてその経営権を認定されていた。「皇弟」は天皇の弟という一般的解釈が存在するが、実際の用例を検討するならば、同母兄が大王位にある場合に用いられる例はむしろ少なく、穴穗部皇子や弓削皇子など大兄以外の有力な皇子に対する

称号として用いられるのが一般的であった。「皇弟(スメイロド)」の用字が天皇号の使用以前に遡れないとするならば、本来的には「大兄」の称号に対応して「大弟(オホイロド)」と称されていたことが推定される。荒木敏夫氏も承認されるように、「長子優先の原理は『大兄の時代』により顕著に見出せるが、そのことが王位継承の絶対的基準になっていない」⁽⁶⁴⁾のであり、「皇弟」という存在は首長一般に要求された人格資質の側面をより強く体現していると考えられる。誤解を恐れずに述べるならば、大兄以外でも皇子宫の経営主体になり得ることは、王位継承上では皇子宫の経営主体であることが大兄の称号自体よりも実質的な意味を持ったと考えられる。すなわち、当時の大王宮の経営実態を考慮すれば、「代替わり」により旧大王宮の組織は原則として解体するので、継承され得ないのであるから、外廷的機構が即位に伴って新たに付加されてくるのではなく、皇子宫の家産と家政機関を基礎に新たに再編されるのが原則であり、皇子宫の経営手腕こそが大王即位にあつての大きな評価基準になりうると思われる。すべての同母兄弟中の長子が必ずしも大兄と称されず、大兄に比較すればその数は少ないが、「大兄の時代」においても「皇弟」が皇子宫の経営主体となり、王位継承資格者と認定されたことの意味は軽視すべきでない。

皇子宫について、本稿ではその経営資格に考察を限定したため、天武朝以降における解体政策や都城制とのかわり、長屋王家木簡の総合的検討など、論じ残した点も多いがすべて今後の課題としておきたい。

註

- (1) 正確には王子と表記するのが正しいが便宜上、このように表記しておく。
- (2) 拙稿『斑鳩宮』について(『日本歴史』四五一、一九八五)、同『斑鳩宮』の経済的基盤(『ヒストリア』一一五、一九八七)、同『斑鳩宮』の経営(『国史学』一四〇、一九九〇)、同『上宮王家と斑鳩』(新版『古代の日本』近畿二、角川書店、一九九一)。
- (3) 拙稿『鳴宮の伝領過程』(『古代史研究』五、一九八六)。
- (4) 井上光貞「古代の皇太子」(同『井上光貞著作集』一、岩波書店、一九八五、初出は一九六四)。
- (5) 直木孝次郎「厩戸皇子の立太子について」(同『飛鳥奈良時代の研究』、塙書房、一九七五、初出は一九六八)。
- (6) 井出久美子「大兄制の史的考察」(『日本史研究』一〇九、一九七〇)、荒木敏夫「書評門脇禎二著『大化改新』論」(『歴史学研究』三六三、一九七〇)、田中嗣人「大兄制」管見(『続日本紀研究』一七八、一九七五)、荒木敏夫「大兄論」(同『日本古代の皇太子』、吉川弘文館、一九八五)。
- (7) 直木孝次郎「大兄制と皇位継承法」(上田正昭他編『セミナル日本古代史』下、光文社、一九八〇)。
- (8) 大平聡「日本古代王権継承試論」(『歴史評論』四二九、一九八六)。
- (9) 門脇禎二「上宮王家滅亡事件」(同『大化改新』論、徳間書店、一九六九、のち同『大化改新』史論、上八徳間書店、一九九一)として再刊、同『蘇我蝦夷・入鹿』(吉川弘文館、一九七七)、井出久美子前掲註(6)論文など。
- (10) 田中嗣人「聖徳太子信仰の成立」(吉川弘文館、一九八三)、寺西貞弘「古代天皇制史論」(創元社、一九八八)など。
- (11) 門脇禎二・井出久美子氏などは大兄一人説をとり、井上光貞・直木孝次郎などは大兄複数説をとる。
- (12) 田中嗣人・寺西貞弘氏は大兄が単なる長子の意味する称号にすぎないとするのに対して、荒木敏夫氏は同じく皇位継承のみにかかわる相即的な制度としての「大兄制」は否定されるが、門脇氏が指摘した社会的通称としての大兄が持つ「宗主権」の継承にかかわる側面は否定していない。
- (13) 篠川賢「六・七世紀の『大兄』」(『成城文芸』一三九、一九九二)。
- (14) 井上光貞前掲註(4)論文所収の表一を修正。

- (15) 泊瀬王宮が飽波宮に比定されることについては拙稿「上宮王家と斑鳩」註(2)論文参照。
- (16) 『古事記』欽明段の所伝には、母が岐多志毗売命の姨、小兄比売とあり、兄弟の順番は、馬木王・葛城王・間人穴太部王・三枝部穴太部王(須虎伊呂杵)・長谷部若雀命とする。兄弟数およびその順番は『日本書紀』の本文と一致する。なお、岐多志毗売命(堅塩媛)の姨とするのは、小姉(小兄)の名にちなむとされる(日本思想大系『古事記』八岩波書店、一九八二Vの頭注)。
- (17) 家令職員令によれば、皇太子以外に「宮」号表記は許されておらず、親王も例外ではなかった。ただし、長屋王家木簡などの実例には「宮」号表記が散見する。
- (18) 『日本書紀』雄略三年四月条、同十二年十月条。
- (19) 『寧楽遺文』中巻、三八三～三九〇頁。福山敏男「飛鳥寺の創建に関する研究」(同『日本建築史研究』、墨本書房、一九六八)によれば、縁起部分には『日本書紀』を参照したことが明らかで、奈良時代末の成立とするが、用明天皇を池辺皇子とするのは独自の表記である。
- (20) こうした異母兄弟間の婚姻関係と王位継承上の地位については、別途考証する必要がある、今後の課題としたい。
- (21) 『日本書紀』崇峻即位前紀用明二年五月条。
- (22) 『日本書紀』欽明二年三月条。
- (23) なお、大海人皇子の年齢記載が『日本書紀』に見えず、『本朝皇胤紹運録』や『神皇正統記』などの史料では中大兄皇子よりも年長となっているという矛盾が存在する。水野祐「天智、天武年輪矛盾について」(『東アジアの古代文化』六、一九七五)、小林恵子「天武天皇の出自と年齢について」(『東アジアの古代文化』一六、一九七八)など参照。
- (24) いわゆる「大津京」が条坊制都城でないことについては拙稿「大津京」の再検討(『史観』一一五、一九八六)で論じた。
- (25) 前掲註(3)拙稿参照。
- (26) 荒木敏夫前掲註(6)書、一〇三頁参照。
- (27) 『日本書紀』天智三年六月条。なお、血縁関係については、『日本書紀』欽明即位前紀・敏達四年正月是月条参照。
- (28) 本間満「大海人皇子の皇太弟について」(『政治経済史学』一七一、一九八〇)。
(29) たとえば、『日本書紀』天智三年二月丁亥条の「大皇弟」には本来、皇太子の意味はなく、中大兄の即位と対応させた美称の「大」は明瞭な後代の潤色であるが、皇弟(オホイロド)としての意味(穴穂部皇子に対する皇弟皇子と同義)は存在したと考える。むしろ潤色の度合いは重出記事とされる天智十年正月庚申条の「東宮太皇弟」のほうが濃いと考えられる。
(30) 『日本書紀』天武即位前紀。
(31) 伴信友「長等の山風」(『伴信友全集』四、国書刊行会、一九〇七～九)、直木孝次郎「天智天皇と皇位継承法」(『人文研究』六一九、一九五五)、本間満前掲註(28)論文、荒木敏夫前掲註(6)書など。本間論文によれば、大海人皇子の立太子を疑う根拠として、確実な即位元年の立太子や皇太弟の実例が平安初期まで存在しないことが指摘されている。
(32) 荒木説では大海人皇子の立太子を認めないのであるが、中大兄皇子の即位にともない、大兄的な地位の継承と、皇子宮の造立が同時に行われたとされる。大海人皇子の地位が中大兄皇子の即位と運動して大きく変化するという点では、立太子説との明瞭な差異はないことになる。
(33) 横田健一「壬申の乱前における大海人皇子の勢力について」(同『白鳳天平の世界』、創元社、一九七三)。
(34) 直木孝次郎「主稱考」(『続日本紀研究』一一二、一九五四、のち同『奈良時代史の研究』八塙書房、一九六八Vに所収)。
(35) 荒木敏夫前掲註(6)書参照。皇太子制度および東宮機構の成立は都城制の成立とも連動し、持統朝の軽皇子以後と考えられる。
(36) 『令義解』禄令食封条。
(37) 『大日本古文書』編年二、二七七～二七八頁。
(38) 同じく「後封」とある中納言や参議の封戸数は、「弘仁格式」段階では各二百戸と考えられるのに対して(『続日本紀』慶雲二年四月丙寅条、「類聚三代格」卷四慶雲二年四月十七日勅、「公卿補任」大同二年条所引四月十六日詔、『日本紀略』大同四年四月乙未条、同弘仁元年六月丙申条)、『延喜式』の封戸数が『新抄格勅符抄』と一致することからすれば、貞観式以後の「民部式」である可能性が高い。なお、滝川政次郎氏「湯沐の令」(『日本歴史』六二、一九五三)は近江令に東宮湯沐の規定が存在したとされるが、前川明久「壬申の乱と湯沐邑」(『日本歴史』二二〇、一九六七、

- のち同『日本古代政治の展開』(法政大学出版局、一九九一Vに所収)が批判されるように、中国の官制にはなく、法制化されたものとは考えられない。また、横田健一氏は『新撰姓氏録』右京神別下に見える丹比宿祢の伝承を基礎に、皇太子と湯沐の関係を強調されるが、本間満前掲註(28)論文が述べるように、あくまで多治比部は「皇子湯沐邑」であり、湯沐が東宮(皇太子)に限定されるものでないことは明らかである。
- (39) 前川明久前掲註(38)論文。
- (40) 今井啓一「壬申の乱と美濃国」(『大阪障蔭女子大学論集』五、一九六七)。
- (41) 直木孝次郎註(34)論文。
- (42) 利光三津夫『律令及び令制の研究』(明治書院、一九五九、第二部第一章。平城京二条大路東西大溝出土の山水図習書にも「主稻」がある。
- (43) 『日本三代実録』仁和三年三月一日条。
- (44) 田中卓「壬申の乱の開始」(『続日本紀研究』一一六、一九五四、のち『田中卓著作集』五 壬申の乱とその前後(国書刊行会、一九八五V)に所収)。
- (45) 『日本書紀』天武元年六月甲申条・己丑是日条。
- (46) 直木孝次郎「一官司二長官制について」(『古事類苑月報』四、一九六七、吉川弘文館)。
- (47) 直木孝次郎「壬申の乱における天武天皇の東征」(『続日本紀研究』一一四、一九五四)は、田中臣足麻呂が三千の軍を指揮する多臣品治の前衛を守ったことや姓の違いなどから田中臣足麻呂・高田首新家の二人は品治の下級職員と考える。
- (48) 拙稿『斑鳩宮』の経営」前掲註(2)論文。
- (49) 横田健一前掲註(33)論文。
- (50) 小林敏男「稲置・屯田の一考察」(『古代文化』二八一九、一九七六)、館野和己「屯倉制の成立」(『日本史研究』一八九、一九七八)。
- (51) 米田雄介「ミヤケの再検討」(『ヒストリア』三五、一九六三)、直木孝次郎「屯倉の管理形態について」(同「飛鳥奈良時代の研究」、塙書房、一九七五)。
- (52) 『令集解』田令置官田条所引古記。
- (53) 横田氏は『古事記』が倭屯田設置を景行朝とするのに対して、『日本書紀』がわざわざ大足彦が太子であった時(垂仁朝)の設置を強調するのは意味があるとするが、直木孝次郎前掲註(51)論文が述べるように、倭屯田が垂仁・景行の宮所在地(纏向珠城宮・纏向日代宮)である纏向付近に所在したことによると考えられる。
- (54) 岸俊男「額田部臣」と倭屯田」(同『日本古代文物の研究』、塙書房、一九八八)。
- (55) 『日本書紀』大化二年三月辛巳条。
- (56) 直木孝次郎前掲註(51)論文。
- (57) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』二一八一九八九、九頁。同二五八一九九二V、二八頁にも「耳无御田司」が見える。
- (58) 同前二一、二八頁。同二五、二八頁。その他、舍人四人を和銅七年九月に京外から召集した木簡もある(同二一、八頁)。
- (59) 拙稿『斑鳩宮』の経済的基盤」前掲註(2)論文。なお、嘉暦四年の「鵜庄絵図」には東南条に「大伴」「又大伴」の坪名があり、姫路勝原区の丁・柳ヶ瀬遺跡(鵜庄域の東に隣接)から「大伴」の墨書を有する奈良時代の土器が数点出土している(兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』八一九八五、太子町教育委員会『播磨国鵜庄現況調査報告』八一九九〇)。
- (60) 直木孝次郎「壬申の乱」(塙書房、一九六一)。
- (61) 拙稿「上宮王家と斑鳩」『斑鳩宮』の経営」前掲註(2)論文。
- (62) 荒木敏夫前掲註(6)書によれば、山背大兄王と並んで泊瀬仲王も王位継承候補とされたとするが、『日本書紀』舒明即位前紀によれば境部摩理勢が斑鳩にある泊瀬王宮に隠れた時、大臣蝦夷は泊瀬王ではなく山背大兄王に対してその引き渡しを要求していることからすれば、その序列は明らかであり、王位継承候補者としての地位も大兄たる山背王の存在に規制されていたと思われる。
- (63) 岸俊男「皇子たちの宮」(『明日香風』一、一九八一、のち同『古代宮都の探求』塙書房、一九八四V)など。
- (64) 荒木敏夫前掲註(6)書、二〇七頁。

(国立歴史民俗博物館歴史研究部)

Management of Prince's Palace
—The Eldest Prince and Imperial Brother—

NITŌ Atsushi

The term, "Prince's Palace" is used to mean a royal palace which is the main residence of a prince and run separate to the imperial palace, in ancient times. This paper aims to examine what kind of royal person was able to become the head of a prince's palace, and under what conditions.

As a result, it was confirmed that the head of a prince's palace was not necessarily limited to the eldest brother, though there was a close connection with the eldest-prince system. An influential member of royalty with the right of succession to the throne was in charge of the management of the prince's palace. The eldest prince, that is the eldest of brothers born from the same mother, became the head in most cases. However, the right to manage the palace was often authorized to a brother born from a different mother, but gifted with excellent character and talent. Such a brother was given the special title of "Imperial Brother (*Sumeirodo*)". Princes Anahobe-no-miko, Hatsuse-no-Naka-no-ō, Karu-no-miko, Ōama-no-miko, and Yuge-no-miko are considered to be examples of such princes. There exists a conventional understanding that "*Sumeirodo*" meant a brother of the Emperor. However, an examination of examples of usage shows that there were in fact few Imperial Brothers whose brother born from the same mother was on the throne, as the conventional theory supposes. The term was generally used as a title for influential princes, such as Anahobe-no-miko and Yuge-no-miko, who were not the eldest of brothers. If we assume that the usage of "*Sumeirodo*" cannot date back to before the use of the title of "*Tennō*" (Emperor), it may be supposed that these princes were originally called "*Ōirodo*", as opposed to the title of "eldest brother".

However, we should note the fact that not all *Irodo* princes of the same generation as the Emperor were called "*Sumeirodo*". It may be considered that only when there was a prince of outstanding character and talent among the second and subsequent brothers, the title of "*Sumeirodo*" was used supplementarily. The succession to the throne was not determined only by the "principle of the eldest brother". It is supposed that there underlay a secondary and supplementary principle of succession, which may be called the "principle of *Sumeirodo*". It allowed for the possibility of succession from among brothers born from different mothers and took into account the character and talent of the successor, even after the Keitai era, which is regarded as the "age of the eldest brother".